

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾くかかりでした。けれどもあんまりじょうずでないという評判でした。じょうずでないどころではなくじつはなかまの楽手の中ではいちばんへたでしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋にまるくならんでこんどの町の音楽会へ出す第六交響曲の練習をしています。トランペットはいっしょうけんめい歌っています。

クラリネットもボーボーとそれにてつだっています。

バイオリンも二いろ風のように鳴っています。

ゴーシュも口をりんとむすんで、目をさらのようにして楽譜を見つめながら、もう一心に弾いています。

にわかに、ぱたっと楽長が両手を鳴らしました。

みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今のところの少し前のところからやりなおしました。ゴーシュは顔をまっ赤にして、ひたいにあせを出しながら、やっと今言われたところをとりました。ほっと安心しながら、つづけてひいていますと、楽長がまた手をぱっとうちました。

「セロっ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだ。みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの譜をのぞきこんだり、じぶんの楽器をはじいてみたりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュもわるいのですが、セロもずいぶんわるいのでした。」

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげていっしょうけんめいです。そしてこんどはかなりすすみました。いいあんばいだと思っていると、楽長がおどすような形をして、またぱたっと手をうちました。またかとゴーシュはどきっとしました。が、ありがたいことにはこんどはべつの人でした。ゴーシュはそこで、さっき自分の時みんながしたように、わざとじぶんの譜へ目を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今のつぎ。はいっ。」

そらと思ってひきだしたかと思うと、いきなり楽長があしをどんとふんで、どなりだしました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。しょくん。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっている僕らが、あの金靴鍛冶だの砂糖屋のでっちなんかのよりあつまりに負けてしまったら、いったいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。きみにはこまるんだがなあ。表情と言うことがまるで出来ていない。おこるもよろこぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっとほかの楽器と合わないもんなあ。いつでもきみだけ、とけたくつのひもを引きずって、みんなのあとをついて歩くようなんだ。こまるよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団が、きみひとり